資料紹介

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧下さい。

山口圭介：**ナショナリズムと現代**　福岡　九州大学出版会　1987　296p.（Ja－323.1－K　21）

ナショナリズムという語は聞き慣れた語である。しかし，ナショナリズムという語で何を表そうとしているのだろうか。時に非難の語として用いられ，時に鼓舞のためにスローガンとして用いられる。広辞苑によれば「民族国家の統一・独立・発展を推し進めることを強調する思想または運動。民族主義・国家主義・国民主義・国粋主義などと訳され，種々のニュアンスがある。」とされ，丸山真男の定義が短かく引用されている。本書の冒頭部分に以下の文がある。「この十数年間の間に日本はおしもおされもせぬ経済大国に成り上がった。それぞれの国のナショナリズムを評価するごく常識的（良識的といってもよい）規準として『弱い民族のナショナリズムは正当性をもち，強い民族のナショナリズムの正当性は疑わしい』という原則がある」。また「日本ナショナリズムの正当性の喪失」，「日本人は気恥ずかしさをともなわずにはナショナリズムを論じられなくなった」等々の現在の日本のナショナリズムの状況を提出して見せる。そして「ナショナリズム論」が混迷し，衰退してきてはいるが，「ナショナリズム論は現代世界の諸問題を考察するための貢献をしつくし」てはいないとし，第一部　民族とナショナリズムの理論，第二部　アフリカにおける民族とナショナリズム，へと論を進める。第二部は8章からなり，アフリカに特有なマルクス主義，ナショナリズムといった問題が取り上げられ，事例としてエンクルマ，ニエレレ，サンゴールがとりあげられる。

さて，小生には，津田道夫の「ナショナリズムとは市民社会における私的エゴイズムの国家レベルの止揚形態であり，その本質は近代の私的エゴイズムである」というのが，よく分る気がするのであるが。（井村　進）

米山俊直編：　**アフリカ人間読本**　東京　河出書房新社　1987　257p.

私たちはしばしば「アフリカ」という言葉を口にしたり耳にしたりする。ところで，「アフリカ」というのはいったいどういう地域で人々はどんな生活をしているのだろうか。たとえば，「アフリカ人」とひと言で言ってもそれはたくさんの民族の集合にすぎない。アフリカ大陸には50以上の独立国があり，個々の国土には複数の民族が住んでいる。また，ひとつの民族がいくつもの国土にまたがった地域に暮らすことも珍しくはない。したがって日本の国土の81.5倍の面積と5億3700万の人口を有するアフリカ大陸の全体像を理解することは実際にアフリカに足を踏み入れた人にとっても至難のわざである。また「アフリカ」は簡単にひとつにまとめて表現できるような均一なまとまりでもない。

本書は読売新聞大阪版の文化面に1984年から85年にかけての1年間，週に1回のペースで掲載された「黒い大陸の鼓動――アフリカ理解のために」に新たに書かれた記事を加えて再編成したアフリカ紹介の書である。アフリカの魅力にとりつかれた研究者42名によって書かれており，その専門分野は人類学，民族学，農学，動物・植物学，経済学，政治学，社会学，文学など多岐にわたる。豊富な現地体験に基づく記事は読者に自らアフリカを訪れ，「アフリカ人」のなかで生活したような“等身大”の感覚を与えてくれるだろう。

アフリカ職業案内；誕生から死まで；生活の場面；集団とのかかわり；政治とその問題；現代経済事情；大自然の中の生命；精神世界；食文化探訪などの11項目に分けて100余の記事を収録する。コミュニケーションの項目中の「日本で買えるアフリカの文学」のリストはさらに興味を深めるのに有用である。

とてつもなく広い「アフリカ」と，そこで暮らすさまざまな人間たちが1冊のなかにぎっしりと詰め込まれた良書である。（山口陽子）

川田順造編：　**黒人アフリカの世界**　東京　山川出版社　1987年　viii，464，34p.

「民族の世界史」シリーズの第12巻として出版された本書は，編者自身の筆になる「序章，複眼的歴史への試み」を巻頭に，以下の四つの章から構成されている。

第Ⅰ章　アフリカの形成　　第Ⅱ章　アフリカにおける歴史の意味　　第Ⅲ章　多様なる民族世界

第Ⅳ章　国家の形成と民族

そして巻末には，本書の執筆に加わった編者を含む5人のアフリカ研究者たちによる「アフリカにおける民族と歴史」と題する座談会の記録が「終章」として付されている。

日本の人類学系の第一線のアフリカ研究者10人が名を連らね，各々のフィールドに関する10編のモノグラフからなる「第Ⅲ章」は，量的にも本文400ページ中，245ページをしめ本書の中核をなしているといえるが，

本書の特色としては，このような人類学的色彩の濃い書物に，「第IV章　国家の形成と民族」と題する章がくみいれられていることがあげられよう。編者の既存の学問的枠組をこえて問題に挑戦しようとする意欲を感じさせられる。同じような意味でこの第IV章の執筆者である政治学者，小田英郎を出席者に加えて行なわれた座談会も本書の特色の一つをなすものといえよう。

よくも悪くも本書は，「黒人アフリカの歴史世界」についての日本の研究水準を示している。「民族の世界史」シリーズの1巻として「民族」と「歴史」という表現がアフリカの「部族」的世界に投げこまれたとき，それらがアフリカ研究者のなかにひきおこすとまどい，混乱が本書の随所にあらわれている。座談会の出席者たちもこの問題を意識しとりあげてはいるが，対応が逃げ腰で他人まかせであり，そのとまどいをおぎなうためか，この座談会では無意味な「(笑い)」が多いのがちょっと気になる。　(原口武彦)

Murray, Martin: **South Africa; Time of Agony, Time of Destiny——The Upsurge of Popular Protest**. London, Verso, 1987 496p.
(323.2－M　115)

1984年の9月，ヴァール・トライアングル北部のタウンシップで始まったアフリカ人の蜂起は，南ア政府の弾圧にもかかわらず，その後各地のタウンシップに広がった。翌85年7月に政府は非常事態宣言を発令し鎮圧に努めた。このことは国際世論の非難を引き起こし対南ア経済制裁に発展し，南アのアパルトヘイト体制は崩壊するかに思われた。

これら一連の事件の起こる背景から各反政府運動の動きについては，これまですでに何冊かの本が書かれてきたが，現地の新聞，雑誌，各組織のパンフレット等に基づきこれほど詳細に論じたのは本書が初めてであり，今後，今回の事件に関する研究のスタンダードなものの一冊となろう。

本書は8章から成り，第1章では現ボータ国民党政権の政策大綱である「全面戦略」とその周辺諸国への適用である「不安定化工作」を論じている。第2章は白人少数支配存続のために国民党政権が実施してきた分離発展政策，工業分散化，強制移住政策，三院制議会成立の経緯を分析している。第3～6章で各反政府組織の動向を追う。まず，1980年に正式に認められた独立アフリカ人労働組合とその連合体としてのCOSATU結成の経緯を明らかにする。次いで反政治組織としてUDF，NF，ANCの団結と対立を追い，これらの諸組織が84年9月のタウンシップの蜂起を契機に「大衆の反逆」として各地に拡大する過程を詳細に追っている。第7章は以上の動きに対する南ア政府の対応を分析する。最終章で著者は，今回の事件を南アの「有機的危機」として把え，体制側（支配者側）の分裂と同時に反体制（反政府組織側）にも対立があり，これらの相互関連が今後の動きに重要な役割を果たすことを指摘している。著者はニューヨーク州立大学社会学部助教授。　(林　晃史)

J．F．マンロー著　北川勝彦訳　：**アフリカ経済史**　1800～1960　京都　ミネルヴァ書房　1987　vii　272p.

包括的にアフリカ現代史を扱った日本語文献としては，山川出版社から『アフリカ現代史』シリーズ全5巻がすでに出版されているが，本書はよりコンパクトにまとめてある。「日本語版への序文」に述べられているごとく，日本で歴史学や経済史を学んでいる学生にとってアフリカ経済史に関する最良の手引きとなろうが，マンロー（1940年生まれ。現在はグラスゴー大学経済史学部所属）の手堅い叙述は，それ以外の読者のアフリカ経済への関心にも十分応えてくれる。

まず第1章で1800年当時を概観したのち，奴隷貿易が衰退していく1800～70年，西欧列強による植民地分割が行なわれた1870～96年，植民地の体制が確立していく1896～1914年，不安定な国際経済により深く巻き込まれていく1914～29年，大不況とその後の経済回復そして戦争に突入する1929～45年，戦後の経済成長と独立が迫る1945～60年という年代別の章立てとなっている。各章では，サハラ以南のアフリカを西，西―中央，南部，東の4地域に区分して，それぞれの地域における動向が叙述されている。この地域差を強調しながらも，欧米を中心に展開される国際経済にアフリカが次第に組込まれていく過程を総体として捉えることが，著者の意図するところであろう。

アフリカに造詣の深い北川氏のこなれた訳で非常に読み易い。あえて訳に注文をつければ，「文脈によっては，必ずしも南アフリカと南部アフリカという訳にこだわらず」（訳者あとがき）に訳出されているが，国名か地域名かの混乱をまねきやすいので，原典どおりの方が望ましいように感じる。また，ゴールドコストや

現金作物などの訳語は，従来のゴールドコーストや換金作物でよかろう。 (池野 旬)

J・リリーヴェルド： **おまえの影を消せ** 東京 朝日新聞社 1987年 614p.

1985年，南アに3年余り常駐した日本人ジャーナリストによるルポとして，伊高浩昭著『南アフリカの内側』が出版され話題になった。どこを切ってもアパルトヘイトが顔を出す「金太郎飴的情況」を，とくに体制や制度の面から歴史的に跡付けた力作であった。

著者もほぼ同じ時期に3年間，やはり特派員として南アに駐在した。1960年代半ばに，ヨハネスブルグ赴任からわずか11カ月で国外退去処分をうけながら，14年を経て再びこの国に足を踏み入れることになった。自らの思考のなかに「相対主義の青黴」が忍び込んだとしながらも，そうした懸念が全く不要なことはあえてアメリカとの関わりを論じた第8章をあげるまでもなく一目瞭然である。

現実を覆い隠すスクリーンとしてのアパルトヘイトが自己増殖をつづけた結果，「構造的な不均衡が人種という基礎のうえに法制化」され，南アは「世界全体の南北問題の縮図」なる様相を呈していると言う。アパルトヘイトの精密化とは分離を繰り返すことに他ならず，自らが呑み込んだ民族集団それぞれの内部にまで対立の契機を持ち込んでしまう。その結果，相互不信が社会に蔓延し，恣意的な公安当局の行為が容認されるような体制ができあがったとみる。

本書の真骨頂は，人を中心に問題を追うことでアパルトヘイトのさまざまな顔を描こうとした点にある。名も知らぬ庶民から高名な人士まで，実に多くの個性が登場する。奇怪なまでの「ごった煮的状況」にある南アでは「あちら側とこちら側」を隔てる何かを設定しないと自己矛盾に陥ってしまう。それを意識しないために，白人は「相互の認め合い」を自分に言い聞かせ，黒人は黙してバスに乗るのである。人種を問わず変革や解放を求める人々は「異端者」と目される。

人間への共感と裏腹に，南アの現状に対する著者の評価は厳しい。P・W・ボータの政策はJ・スマッツと何ら変わるところがないと断じ，交渉に一切応じない反アパルトヘイト組織は当局のプロパガンダを後追い証明している，と手厳しい。唯一，可能性を見いだしうるのは黒人労組だとしとている。人種的・民族的反目の根はそれぞれの伝統の衝突から生じる，したがって必要なのは「差異を知るための知恵」なのだと主張する。1986年度ピュリツァー賞受賞作。 (望月克哉)

Havnevik, Kjell, J, ed: **The IMF and the World Bank in Africa**. Uppsala, Scandinavian Institute of African Studies, 1987 186p.

スウェーデンのウプサラにある北欧アフリカ研究所は，1987年1月に，アフリカおよび西欧諸国の研究者，専門家を招いて，「アフリカにおけるIMF，世銀および北欧」と題する国際セミナーを開催した。本書は同セミナーで発表された報告および討議コメントを再録し，北欧アフリカ研究所に属するノルウェー人研究員ハブネビックが編集したものである。

世銀の『バーグ報告書』(1981年)は，アフリカ諸国の経済危機の原因を主として国内政策の失敗に帰し，経済発展回復の処方箋として，輸出産品(主に農産品)の価格インセンティブを強め，工業保護障壁の低減，とくに公企業への優遇措置や価格統制を弱めて，より競争的な産業体制へ転換することを説いた。80年代にはアフリカ諸国の多くが，IMFおよび世銀の資金導入を受け入れ，国際収支危機からの脱出をはかっているが，IMFおよび世銀はこれら資金受入国に厳しいコンディショナリティを課し，『バーグ報告書』の方向にそった政策改革をせまっている。本書は，コンディショナリティの当否，その受入国への影響，北欧諸国の立場，代替案の可能性など，総合的に問題点を検討している。

採録された報告のテーマは以下のとおり。

(1) 序論 (Kjell J. Havnevik) (2) IMFと世銀との関係について (Tony Killick) (3) コンディショナリティは変えられるべきか(Frances Stewart) (4) IMF，世銀およびサブサハラ・アフリカ(John Loxley) (5) IMFとインド (Cheryl Payer) (6) IMFと世銀の関係者の応答 (Louis M. Goreux, Ravi Gulhati) (7) IMF／世銀のコンディショナリティとナイジェリアの構造調整プログラム (Yusuf Bangura) (8) 経済混乱と従属，スーダンの事例 (Just Faaland) (9) IMFとザンビア経済の事例(P.S.Ncube, M. Sakala, M. Ndulo) (10) IMF／世銀哲学の影響，タンザニアの事例 (Samuel M. Wangwe) (11) 北欧諸国とIMF／世銀 (Knud E. Svendsen) (12) IMF／世銀に対する北欧の視点 (P. Korpinen, H. Lundström, U. Haxthausen) (吉田昌夫)